

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

片倉もところによるサウディ・アラビア，ワーディ・  
ファーティマ地域を対象とするフィールド調査資料  
，特に写真資料の社会的特徴について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 縄田, 浩志, 片倉, 邦雄, 藤本, 悠子, 河田, 尚子, 郡司, みさお, 古澤, 文, 渡邊, 三津子, 遠藤, 仁, 石山, 俊 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009859">https://doi.org/10.15021/00009859</a>

## 片倉もとこによるサウディ・アラビア、 ワーディ・ファーティマ地域を対象とする フィールド調査資料, 特に写真資料の社会的特徴について

縄田浩志<sup>1)2)</sup>・片倉邦雄<sup>2)</sup>・藤本悠子<sup>2)</sup>・河田尚子<sup>2)</sup>・郡司みさお<sup>2)</sup>・  
古澤 文<sup>2)</sup>・渡邊三津子<sup>2)3)</sup>・遠藤 仁<sup>1)4)</sup>・石山 俊<sup>5)</sup>

1) 秋田大学, 2) 片倉もとこ記念沙漠文化財団, 3) 奈良女子大学,  
4) 人間文化研究機構, 5) 国立民族学博物館

### 1 中東社会を対象とする写真撮影の歴史 — 写真の利用目的と 説明文をめぐる

中東(西アジア, 北アフリカを含む)ムスリム社会における写真撮影の歴史を理解しようとする時, 西洋によるオリエンタリズム(サイード 1986)の文脈に沿って紐解いていかねばならない(Alloula 1986)。

1798年, ナポレオンによるエジプト侵攻が, 西洋のオリエンタリズムに火をつけた。古代の不思議とミステリーに満ち溢れたエジプト, また聖書の舞台としての聖地パレスチナへの興味を皮切りに, 中東全般の生活, 思想, 文化, 慣習に対する知的な好奇心が芽生え, 芸術的な魅惑に人々は惹きつけられていった。1839年に, 日中野外であれば感光時間が数十分でポジティブ画像を固定づける実用的なダゲレオタイプの写真撮影法が発明されると, 写真撮影は瞬間に広まった。発明から50年の間にプロとアマあわせて250人に達する宣教師, 外交官, 考古学者らが撮影機材を持ってオリエント世界に赴き, 旅, 景観, 市場, 通り, 建築, 遺跡, 衣装などを撮影の対象としはじめたのである(Stapp 2008; Özendes 2008)。

1860年代から1890年代にエジプトを中心として観光客向けに多くの写真を生産したギリシア出身の商業写真家Zangaki兄弟の作品群は, よく知られている(Perez 1998)。ナイル川に浮かぶ舟, ナイル川沿いを歩くラクダ・キャラバン, ピラミッドとナツメヤシ, ピラミッドにのぼる観光客とガイド, ピラミッドとスフィンクスをバックにラクダにのった観光客等, 現在でも多くの人々に好まれる主題と構図の写真を多数撮影した。中には, ナイル川上流のアスワンハイダム建設以降は見られなくなってしまった構図すなわち, ピラミッドをバックに氾濫したナイル川に水没するナツメヤシと人々, といった貴重な風景をおさめた写真もある。また野外で人々が実際に営む生活の一端を写しとったと考えられる写真群としては, アズハル・モスクに集まる人々, 髪をそる床屋, パザールの人々, 水つぼを頭にのせた女性たち, 水売りの男性と水がめと女性たち, ロバと少年, ラクダにのったビシャーリーン族(上エジプトからスーダン北部の紅海沿岸にかけ

て居住する民族)の男性や女性、ヌビア族(上エジプトからスーダン北部にかけてのナイル河岸に居住する民族)の男性、といったタイトルが冠されて残されており、ある意味、これは民族誌的なフィールド調査写真の先駆けと位置づけることも可能であろう。

その一方、室内のスタジオで撮影された写真群もある。アラビア語教師の肖像写真、2人のアラブ女性(1人は椅子に座って水がめを膝の上ののせ、もう1人はその女性の肩に手をかけている。2人とも鼻・口は布で隠しているが、髪を覆っているのは1人の女性のみである)、トルコ人の踊り子(手に動きがあるので踊りを再現している感じが感じられる)、水たばこを片手にコーチにもたれかかるトルコ女性、といったタイトルの写真があるが、その撮影にあたっては、どの程度まで演出が施されたのかは今となっては想像するしかない。

Zangaki兄弟撮影のエジプト写真の利用目的は、観光客向けの商業販売であった。またポーズをとらせた肖像写真が多く含まれているにもかかわらず、主題・構図・記録といった点において歴史的な評価は定まっている。現在、そのコレクションはプリンストン大学、ケンブリッジ大学、ボストン美術館、アムステルダム国立美術館等に保管されると同時に、一般公開されている写真アーカイブLuminous-Lint(3,634のコレクションから103,264シーンの写真を掲載)にも104シーンが登録されているため、誰もが簡単にウェブ上で見ることが出来る(Luminous-Lint 2020)。

Zangaki兄弟はエジプトのポート・サイドにスタジオを持っていたが、すでに1850年代には、オスマン帝国の主要な都市であったベイルート、エルサレム、コンスタンティノーブル(現在のイスタンブールの前身)を中心として、現地に多くの写真スタジオがつくられるようになっていた。最初の写真スタジオは、アルメニア人とギリシア人によってコンスタンティノーブルにつくられたと考えられる。当時のムスリム社会の受けとめ方としては「宮廷関係者の間では肖像画を描かせる伝統が存在していたにもかかわらず、人物を画像化することを認めないイスラームの正統派的慣行に従って、ムスリムは写真に撮られることを嫌がった」(Özandes 2008)と説明されている。

当時の新しい技術による写真撮影は「本当のオリент」を記録する機会を提供するはずであったが、写真家は西洋人が事前に思い描いている「オリエン트의イメージ」を増幅させるようなシーンを作りあげることが多かったとされる。西洋人はとりわけ東方の女性に魅了されていたので、この要求に答える形で「トルコ女性」や「若いトルコ少女」といった魅惑的なタイトルを冠した新しいカテゴリーの写真が生まれ出された。ただし肖像にされた女性は外国人もしくは現地の売春婦がほとんどであったという。なぜならば、この類の写真のためにポーズをとる一般のトルコ人やムスリム女性は存在しないからである。写真家がモデル女性を見つけるのに苦労した場合は、男性が女性の衣装をまもって撮影することさえあったという(Özandes 2008)。

スイスに生まれたJean Geiser(1848~1923)は、幼少期に家族でフランス植民地下の

アルジェリアへ移住し首都アルジェに住みはじめたが、母とそのパートナーのアトリエを引き継ぐ形で1860年代後半には写真スタジオを持つこととなった。アルジェリア全土の様々な景観、暮らし、植民地支配の様子を記録するだけでなく、オリエンタリストの夢想でしかないハーレムを渴望するマーケットに応じて、スタジオで撮影したセミヌードやエロティックなポーズをとった女性の偶像写真をポストカードとして大量生産し、19世紀末にかけて写真スタジオは大成功をおさめた (Schmidt and La Rock 2019)。やがてこのアルジェリア女性のイメージは、1900～1930年を中心としてキャビネット・カードやポストカードとしてフランス中に広まり、植民地政策においてアルジェリア人を支配することを正当化する意識の強化へともつながっていったと考えられている (Alloula 1986; Howe 2008)。

それでは、現地出身の写真家、もしくは女性の写真家は、写真史上初期の19世紀後半から20世紀初頭には存在しなかったのだろうか。

ごく最近になって、少数ながら存在したことが明らかになってきた (Verde 2019)。後期オスマン朝から第一次世界大戦後にかけて、現地写真家の歴史が埋もれていた理由は、地域の不安定な政治と紛争等によって写真スタジオから写真や文書が失われることが多かったからで、また、家族経営も多かった写真スタジオにおいて、多くの女性が現像、艶出し、色付けといった舞台裏で働いていたことが想像されるが、記録にはあまり残っていないからである。女性の名が確認される貴重な例としては、ウクライナ生まれの写真家 Shlomo Narinsky と Sonia Narinsky 夫妻の例がある。夫妻は、19世紀後半にパレスチナにおいて同地で生まれたユダヤ人を被写体として販売目的の写真を多数撮影していた Jamal Brothers のパートナーであった。他にも、フランス出身の Lydie Bonfils は、夫の Felix とともに1867年からベイルートで写真スタジオを営んでいたが、1885年に死んだ夫 Felix の後を継いで数十年間1人で経営し続けた。彼女が撮影したと思われる現地の女性を被写体とするスタジオ写真は、女性写真家の前でポーズをとっているからか、被写体女性は自然体のように感じられる (Sheehi 2019) とされる。

20世紀にはいると「パレスチナの唯一の国民的女性写真家」と自称する現地女性写真家 Karimeh Abbud が現れた。彼女の父 Said Abbud は、ベツレヘムのルーテル派の牧師で、Galilee 地域 (現在の南レバノン) の Khayam 村の出身であったが、フランスとイギリスによって第一次世界大戦後にパレスチナとレバノンの国境が定められる前のオスマン帝国下の領土であった時のエルサレムの Schneller Orphanage で学んだ。娘の Karimeh Abbud は1893年に生まれ、1899年には家族でベツレヘム地域に移ってそこで彼女は人生のほとんどを過ごした。1860年代はじめには、彼女の家の近くの Cathedral of Saint James があるアルメニア人地区にエルサレムで最初の写真学校が設立されていた。ベツレヘム地域で活躍していた5人のルーテル派の写真家の誰かから彼女は訓練を受けたと推測されている。Karimeh Abbud のスタジオはベツレヘムの彼女の故郷にあり、当時の男性写

真家よりも家族の家庭生活や女性の活動にアクセスしやすい環境に恵まれていた。彼女はほとんどの仕事を室内での肖像写真に捧げたが、野外に繰り出した家族の小旅行や社会的行事の写真も残されている。彼女のコレクションの中には自身の姉妹や従妹の写真も多く見つけることができるので、彼らをトレーニングの被写体としたと考えられている。彼女の肖像写真では、当時一般的であったポーズと背景を用いて、例えば被写体には花を手にもたせて座らせ撮影している。しかしながら、被写体は安心しており、陽気にさえ見えることが多く、そのおかげで、そう見えてほしいであろう中流階級のパレスチナ人の姿を覗き見ることができると評価されている (Nassar 2019)。

それでは、遊牧民社会やオアシス社会の人々の生活そのものを記録した写真のはじまりは、いつに遡ることができるのであろうか。

「沙漠の女王」の異名をとった考古学者、登山家、紀行作家にして英国諜報員でもあったガートルード・ベル (1868~1926) は、第一次世界大戦勃発直前の1913~1914年にアラビア半島北部を旅した。ダマスカスからハイルをへてバグダードに向ってダマスカスに戻った。その間に撮影された写真は当時の人々の生活を切り取った貴重な記録であり、かつ日記と対応できるため (Bell 2020)、撮影地、撮影内容に関する一定の情報が整っている。例えば現在のサウディ・アラビア北西部ヨルダン国境近くのアッ=トゥバイクを訪れた時の写真として「テントの外でたたずむシャラーリー族の女性と子供」、ムハンマド・アブー・タイイの野営地のテントの中の男性たち、コーヒーをつくっているのはサウード」、ガートルード・ベルのキャラバンのメンバーのムハンマド・アル=マアラウィーとムハンマド・アブー・タイイの野営地にいた部族の女性」等がある。ジャウフ近くのワーディ・ファジュールでは「ガートルード・ベルのキャラバンと共にキャンプ中のシャンマル族の女性とテント」といった写真もあり、テント暮らしの遊牧民社会の男性、女性、子供を写真に収めている。マッカへの隊商ルート沿いのオアシス都市として栄えたハイルを訪問した折には、「ハイルの子どもたち」、「ハイルの女の子たち」、「座っている女性」のように人々の様子を収めた写真があるが、中でも被写体とした女性に関する詳しい記述が残されている1914年3月に撮影された「トゥルキーヤ」というタイトルの写真からは多くの情報を読みとることができる。日記には「スルタンからムハンマド・アル=ラーシドへの贈り物となったチェルケス人に会った。彼女の名前はトゥルキーヤという。全ての女性はしっかりとベールで覆われていたが、彼女は深紫の外着の中には鮮やかな赤と紫の綿布のローブを着ており、首にはきめの粗い真珠の紐を巻いていた。彼女は自身の体重と同じ重さの金ほどの価値とされている、ということを知ってくれた。彼女はおしゃべり好きな人で、一緒にすばらしい驚嘆すべき時間を過ごした」とある。モノクロ写真なので色合いまではわからないものの、室内に置かれた絨毯やひじ置き、衣服や装身具、顔をあらわにしているトゥルキーヤという女性の表情やたたずまいの細部まで知ることができる貴重な記録写真である (Gertrude Bell Archive



2020)。ベルによって撮影された写真群は、中東における民族誌的フィールド調査写真と位置づけることが可能な最も初期の一つと考えられる。

体系的な民族誌的記録として豊富な写真を掲載している作品としては、エルサレム生まれのアラブ活動家で英国委任統治領パレスチナの何か所かでディストリクト・オフィサーも務めた‘Ārif al-‘Ārifによるものを待たなければならない。1944年にアラビア語で出版され、その英訳はメルボルンの新聞社編集長とオーストラリア赤十字のサポートを得て1974年に出版されている (al-‘Ārif 1974)。本の冒頭を飾る肖像写真には、「典型的なベドウィン」という名の下に、「Sheikh Jaddu’ El-‘Atham」と被写体となった人物の実名が掲載されていることからわかるように、南部のベエルシェバ (Beersheba) の実在の遊牧民社会の暮らしを記述した民族誌と形容できる力作である。服装、食べ物・飲み物、宗教、女性の日常生活、財産、結婚・複婚・離婚、慣習法、もてなし、口頭伝承、家畜、交易、水・土地利用、部族組織などについての記述とともに、写真26シーンと地図1枚を掲載している。写真26シーンのうち7シーンは女性を対象としたもので、「花嫁はラクダに、花婿はロバに」(ラクダに乗る花嫁とロバをひく花婿、また数十頭のラクダの群れが確認できるシーン)、「子供を養育するベドウィン女性」(母親が赤ん坊に母乳をあげているシーン、女性は顔を覆っていない)、「洗濯をするベドウィン女性」(水たまりの横で服を洗っている1女性のシーン)、「小麦をきれいにするベドウィン女性」(ふるいの上に広げた小麦からおそらく穀粒を選んでいる3女性のシーン)、「小麦を挽くベドウィン女性」(石臼をまわしている2女性のシーン)、「家畜を水場に連れて行く」(水つぼをロバに振り分けまた手に持ってその上にまたがる女性と水場周辺に男性や複数のロバが確認できるシーン)、「視察中にベドウィンの女性たちに話しかける筆者」(筆者男性が5人の女性うち2人は少女、1人は幼女、と共に写っている写真、顔を覆っているのは1女性のみ)である。どの写真に写っている女性もすべて髪を覆っているが、顔を覆っていない女性は母乳をあげる母親と筆者と共に写っている女性1人に限定される。このような状況から想像されることは、‘Ārif al-‘Ārifはおそらく被写体の女性(もしくはその男性親族)から承諾をえて、写真を撮影したことである。ただし残念ながら、それを証明できる記述はない。また、父や祖父や父祖の名と共に、つまりいわゆるフルネームで本文に実名が記載されていると判断される人物の記述が多数あるが、女性の場合はフルネームは明らかにされていない。

以上のように、中東社会を対象として撮影された写真、特にフィールド調査写真のはじまりにまで遡ってその歴史を振り返ってみても、判然としないことがある。それは、ムスリム女性は自身が写真の被写体となることをどのようにして認めていたのか、もしくは認めていなかったのか、またその写真の利用のされ方やその範囲を果たしてどこまで意識していたのか、という点である。民族学、文化人類学の発展に伴い、中東社会においても、その後、写真による記録が多数残されるようになって、このような疑問に

明確に答えている記述は非常に少ない。もちろん現時点では、中東社会を対象とする植民地時代の記録やそれ以降の民族誌を網羅的に探索できたわけではないが、写真の被写体の肖像権をめぐる諸課題は、今後検討していかねばならない重要事項と考える。

本稿では、サウディ・アラビア、ワーディ・ファーティマ地域を対象とするフィールド調査資料の中でも、特にフィールド調査写真を中心として、調査対象もしくは撮影対象であった人々の側から見て、同調査資料がどのような価値や意義を持ちうるのかといった点を、検討していきたい。

## 2 片倉もとこフィールド調査写真の公開に向けた問題発見

### 2.1 片倉もとこフィールド調査写真の初公開

片倉もとこの一周忌にあたる2014年2月に開催された片倉もとこ記念沙漠文化財団の設立披露パーティーでは(郡司 2014)、スライドショーとパネルディスカッションの時間を設けて、片倉もとこによるサウディ・アラビアにおけるフィールド調査開始のいきさつ、ワーディ・ファーティマ地域の紹介、人々の日常生活、「ゆとろぎ」の世界、結婚風景、生活の変化、の順に片倉もとこの著作の主だった考察を引用また解説しながら、フィールド調査写真を100シーンほど紹介していった。

パネルディスカッション終了後に、サウディ・アラビアの複数の関係者の方々から、写真の記録を高く評価する言葉をいただいた。が同時に、写真の取り扱いについての示唆と注意を受けた。その内容は、財団関係者にとって大きな財産となった。

片倉もとこフィールド調査写真を紹介する際に、財団関係者が気にしていたことがある。それは、イスラーム社会では一般的に成人女性の写真を家族以外に公開することは認められない、という点、とりわけ現代サウディ・アラビアにおいては、公共の場で女性が顔全体を見せることはない、という点であった。そのため写真を選択する際には、プライベートな家族写真もしくは成人女性の顔が写っている写真は基本的に除外した。それでも様々な観点から吟味して公開にふみきった写真があった。

しかしながら、そのような考え方だけでは、まったく十分でないことがわかった。会場で公開した写真の何枚かについて、不適切であった具体的な理由をサウディ・アラビアの方々から以下のように説明された。

### 2.2 公開すべきでなかったと指摘を受けた写真

最初に取り上げる写真は、女性が衣装を身に着ける様子で、外着の巻きつけ方の順序がわかるように連続で撮影された写真である。縄田浩志(第1筆者)は、サウディ・アラビアやエジプト、スーダンにおいて長期フィールド調査の経験があるものの、男性であるため、女性が衣装を着る際の手順をなかなか理解することが難しかったという経験

を持ち合わせていたので、この写真の民族誌的価値が非常に高いことを理解していた。また河田尚子（第4著者）はムスリム女性の身だしなみとして、しっかりと髪は覆われているし、体のラインも出ていないので問題はないと判断していた。また藤本悠子（第3著者）は、この写真は片倉もところ本人によりすでに公開済みであることを確認したため（片倉他編 2002: 318）、問題はないであろうと考えたのである。しかしながら注意を受けたのは、女性の手首や足首が出ていることは問題ないとしても、足や手の一部、また顔が見えている状態は良くないし、そもそも着替えは私的空間で行われるもので他人に見せるものではないから、公の場での表象は認められないというのである。またこの写真を会場で示した折に撮影された写真を見返してみると（写真1）、会場の参加者の中には、この写真が投影されている画面をスマートフォンやデジタルカメラで撮影している人々を確認することができ、会場で公開した写真の撮影やその二次利用が厳禁であることをあらかじめしっかりと伝えなかったことについても、反省すべき点と考える。この写真の扱いに関連して、その後の2018～2019年にかけてのワーディ・ファーティマ地域を訪問して実施された再調査を通じて、私たち調査グループはその写真の被写体であった女性の子息との交流を始めることができたが、片倉もところがこの写真を著作で公開した理由としては、被写体女性との信頼関係そして写真利用に関する承諾がおそらくあ



写真1 片倉もところ記念沙漠文化財団設立披露パーティーにおいて片倉もところフィールド写真を披露した際に、公開における課題を指摘された写真  
撮影：藤本悠子，2014年2月21日，東京



ったことを、知ることになった。とはいえ、この写真の公開が不適切であるという指摘を真摯に受けとめなければならない。

次に取り上げる、女性が水たばこをくゆらせている写真は、さらに問題があると注意された。基本的に女性の私的空間での活動を他人の眼前にさらすことは許されず、特に水たばこを女性が吸うことは、ある地域、ある時代にはあったとしても、それを公の場に顔が見える形で個人が特定される形で示すことはあってはならない、ということであった。その写真は、女性はスカーフで髪の毛をしっかりと覆っているものの顔は出ており、外着ではなく明らかに内着で、肘置きにもたれかかって、くつろいでいる様子をとらえたものであった。加えて、プレゼンテーションと説明の仕方にも不手際があった。ムスリム女性の「ゆとろぎ」の世界が感じられる好例として、片倉もこの文章とともに女性がくつろいでいる様子を解説することを目的としてこの写真を選んではまったのであるが、これはサウディ・アラビアではなく中東の別の国において撮影された写真であった。その写真をサウディ・アラビアで撮影された一連の写真と連続して示してしまったので、来場者に大きな誤解をもたらす結果となってしまったのである。またこの写真は確認できた限り、片倉もどこ自身でさえ出版物では公表していなかった。タバコやアルコール飲料といった嗜好品に対するイスラームの考え方も、法学派、時代、地域、国家、個人によって大きく異なるが故に、最大限の注意を払うべきであることを痛感した。

写真の取り扱いについての指摘は、女性が被写体である写真だけにとどまらなかった。婚姻契約時に集まった男性親族の中で花嫁の父と花婿がちょうど握手を交わしている瞬間をとらえた写真を紹介した。イスラームでは婚姻は、イスラーム法に則り人間同士の契約として結ばれ、契約式の光景の記録は大変稀少である。被写体は男性だけの写真であるし、出版物においてすでに公開されていたので（片倉 1979: 89-90; 1984: 14-15）、その記録的価値を説明した上で使用することに全く問題がないと考えていた。しかしそうではなかったのである。誰と誰が契約をしているのか、男性たちの顔が写っているので個人を特定することができるし、そこから花嫁個人の特定も可能である。花嫁本人は写り込んでいないものの、結婚の契約を結んだ夫婦を特定できるコミュニティーのメンバーの前では、この写真を示すのは不適切である、という指摘であった。この写真はサウディ・アラビア、ワーディ・ファーティマ地域で撮影されたものと想定していたが、その地域の当時の様子を知っている関係者が参加する今回の場では、示すことは不適切であったと考えられる。ただしその後の私たち調査グループによるワーディ・ファーティマ地域の再調査では、今のところ、この写真の被写体の家族のことを知る関係者に会うことはできていない。インタビューをした人の中には、ワーディ・ファーティマ地域ではなく、さらに南の地域で撮影されたのではないかという意見もあった。この写真を、サウディ・アラビアの関係者がいないところで、個人が特定できない形で示されるのであれば、それほど問題になることはないであろう、という見解もあわせて当時会場にい

たサウディ・アラビアの関係者から教示された。つまり、写真を公開する際、その写真の被写体である人物と、その写真を目にするであろう人物との間の関係性、また公開の媒体とその媒体を通じてアクセスが可能となる人々の範囲についても、最大限留意しなければならない、という点にはじめて思いがいたった。

そして最も重要な考え方として念押しされたのは、私的空間や室内で撮影された写真は、基本的にはプライベートな家族写真であり、その被写体本人とその家族以外の人々には原則見せるものではなく、一般公開することは適切ではない、という点であった。

### 2.3 フィールド調査写真の公開をめぐる課題認識

写真公開の準備に携わった財団関係者は、中東を中心としてアラブ・ムスリム社会の田舎や都市においても滞在経験を持ち、女性も男性も、イスラーム教徒も含むメンバーではあったが、それでも写真一枚一枚についてしっかりと多角的に検討しなければ、適切な公表にはつながらないことを痛感し、様々な点で深く反省した。

この時点では、片倉もところフィールド調査資料の全貌はまだつかめておらず、会場で公開した全ての写真について、いつ、どこで、何を、誰を対象として撮影したのか、という情報を正確に把握することはできていなかった。公開に際して、これらの点は非常に重要な基礎情報であることをあらためて認識した。また、被写体の性別にかかわらず、被写体の人物とその写真を見るであろう人々との社会的な関係性を強く意識して、公開の範囲と媒体や公開手段を限定しなければならないということを認識した。そして最も注意しなければならないのは、やはり女性を被写体とする写真群であり、その公開の可否は、おそらく決して単純な限定された基準で計れるものではなく、時代や地域、また社会や個人によっても異なる可能性を十分想定しなければならない、という点についてであった。

遺された片倉もところフィールド調査写真には、片倉もところ本人が明確に述べていたように「約束を守って人にはみせていない」(片倉 1984: 15) 写真が含まれており、調査対象であった地域コミュニティとの信頼関係を第一にしなければならないことが明確である。その観点からは、片倉もところフィールド調査写真の学術的価値がいかに高くあろうとも、現地社会との新たな信頼関係の構築なしには、写真の整理を続けて公開に結びつけていくことはできないと判断された。

このような認識を大前提としつつ、以下で述べるように、現地社会や調査対象であった地域コミュニティにとっても片倉もところフィールド調査資料が社会的価値を有していることを認識したことが、フィールド写真資料の整理そしてデジタルファイルのアーカイブ登録へとつながっていったのである。

### 3 ワーディ・ファーティマ地域の再訪とフィールド調査写真の持つ社会的価値の認識

#### 3.1 ワーディ・ファーティマ地域への再訪

##### 3.1.1 再訪となぜ言えるのか

2015年3月、ワーディ・ファーティマ地域を訪問した財団メンバーは、片倉邦雄評議員会議長（元駐アラブ首長国連邦、駐イラク、駐エジプト大使）、吹田靖子評議員（「ハナエモリ・スタジオ」アドバイザー）、郡司みさお理事（G-プランニング主宰）、河田尚子理事（世界宗教者平和会義（WCRP）日本委員会婦人部会委員）、縄田浩志理事（秋田大学大学院国際資源学研究科教授）、藤本悠子財団事務局秘書（東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了）の6名であった。

メンバーは、性別、年齢、専門、そして片倉もとこ（元の調査者）との関係性という点で、多彩でバランスがとれていた。男性2名、女性4名のうち、夫（遺族）であり調査当時共に村入りすることもあった片倉邦雄（80歳代）、片倉もとこの大学時代の親友として共に女性が活躍する場を切り拓いたいわば同志としての交流が続いていた吹田靖子（70歳代）、指導学生であり研究補助員も務めた河田尚子（60歳代）と藤本悠子（30歳代）、夫の赴任地であったサウディ・アラビアの長期滞在中に経験した生活を著作に著わしたという点で共通点を持ち面識もあった郡司みさお（50歳代）、また指導学生ではないが研究の影響を受け交流があった縄田浩志（40歳代）で構成された。最初のワーディ・ファーティマ調査当時に妻・片倉もとこに同行することもあった夫・片倉邦雄が参加したため、この訪問は再訪と位置づけることが可能であろう。「私は半世紀前の『ワーディの昔』を知る唯一の生き証人、そして『添乗員・浦島太郎』として参加した」と片倉邦雄は述べている（片倉 2015: 15）。

また、2014年3月に国立民族学博物館において、同博物館・国際日本文化研究センター・比較文明学会関西支部共催の公開シンポジウム「片倉もとこ先生をフィールドワークする」が開催された折、片倉邦雄は片倉もとこがサウディ・アラビアのワーディ・ファーティマを調査地として定めて手がけたフィールド調査手法の特徴として、(1) 遊牧民の人たちとの信頼感の醸成（情解）、(2) コミュニケーションの手段としての口語アラビア語の駆使、(3) 写真撮影やKJ法によるカード作成等綿密な資料収集、(4) 調査村の人々と生活を共にしたこと、(5) 調査村への訪問を反復したこと、の5点をあげた（河田 2014: 8）。

また「片倉もとこの人間像」として、どのようにワーディ・ファーティマで調査を実施できるようになったのか、以下のように述べている。

その頃、同王国は紅海沿岸のジッタからマッカ方向に出れば道路の両側斜面に遊牧民の黒い

テントが点在し、翌日にはさっと消えている風景が常だった。もところは移動する彼らを辛抱強く追跡し、羊群を追う遊牧民の少女に話しかけようと近寄り、砂をぶつけられたりしながらも、70キロ離れたワーディ・ファーティマにたどりついた。調査の手がかりを掴んでからは、ジープでも沈没する沙漠の悪路にも慣れ、何度も通った。

当時は人口調査等も進んでおらず、厳しい宗教的戒律や閉鎖性から情報提供者の確保は困難だったが、ワーディ・ファーティマ社会開発センター所長の温かい庇護を得て、もところは家族構成、家畜保有数、定着化、土地所有、水利灌漑の実態等を綿密に調査した。本人がいつも述べていたが、自分が女性であるのみならず、既婚者であり母親であることが遊牧民の信頼を得る大切な要素となった。結婚式に夫婦で招かれることもあったが、男女のテントは隔離されており、私は男衆に囲まれ、ジュースと羊肉でおなかいっぱい。もところは女性と男性のテントの間を往来し、華やかな衣装と歌や踊りの様子を伝えてくれた。

ただし村民から「友人」としての付き合いなのか、「研究者」としての情報収集なのか、疑問を抱かれることもあった。研究者の宿命とはいうものの、妻、母親、研究者という、ひとり三役のジレンマに悩みながら、一研究者として「和して同ぜず」を貫き通し、生涯イスラームの理解に努めつつも一定の距離を置くようにしていた。これは「情の人」、もところにとって辛い試練であったかもしれない（片倉 2019: 26-27）。

ワーディ・ファーティマ地域への訪問が実現した最も大きな理由は、ワーディ・ファーティマ地域における調査の苦楽を共にした片倉もところ・片倉邦雄夫妻と、ワーディ・ファーティマ社会開発センター元所長アブドゥッラヒーム・アル＝アフマディ氏との長年にわたる交流が続いていたからこそであり、アブドゥッラヒーム氏が片倉もところによるフィールド調査の学術的特徴また社会的価値を的確に理解していたからであった（アル＝アフマディ 2014; 縄田・藤本他 2021）。

片倉もところによるワーディ・ファーティマ地域における調査を時間軸に沿って整理するとすれば（図1）、集約的な調査期間（1968年～1970年）、その後も継続された追跡調査期間（1971年～2003年）、そして新たな調査グループによる再調査期間（2015年～2019年）に分けることができるが、アブドゥッラヒーム・アル＝アフマディ氏から見れば、

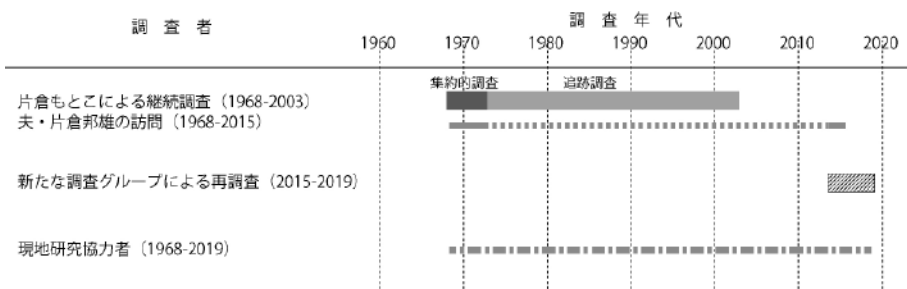


図1 片倉もところによるサウディ・アラビア、ワーディ・ファーティマ地域の継続調査（集約的調査、追跡調査）期間、新たな調査グループによる再調査期間、また、最初の調査研究者の夫と現地研究協力者の関わり

ワーディ・ファーティマ地域におけるフィールド調査のサポートは、1968年から2019年にかけて継続的に行ってきたと言える。アブドゥッラヒーム氏は片倉夫妻との途切れない交流の一環として、およそ半世紀後の再調査をも支援したことは特筆に値する。その結果として、片倉もこの夫・片倉邦雄が、集約的な調査期間（1968～1970年）のみならず、再調査を開始した最初の訪問時（2015年）にも同行できたのであるから、片倉邦雄を最初の調査研究グループの一人と見なすことが許されるのであれば、調査対象国の関係者の一貫したサポートのもと、半世紀以上の期間にわたり途切れずワーディ・ファーティマ地域におけるフィールド調査研究を継続してきたと形容することも可能である。その場合は、再調査（re-study）も、ある意味では追跡調査（follow-up study）と位置づけられる。事実、調査対象国の関係者・関係機関は、夫が再訪したことに心からの敬意を払い、これまでの関係を忘れることなく、さらに発展させようとする新たな調査グループの希望に応えようとする姿勢が感じられる。

### 3.1.2 ワーディ・ファーティマ社会開発センターの協力

アブドゥッラヒーム・アル＝アフマディ氏は、自身が培った人的ネットワークを駆使して、元の所属先ワーディ・ファーティマ社会開発センターが、今回の訪問の受け入れ先となるように、ワーディ・ファーティマ社会開発センターが所属する本省の社会開発省を通じた手続きを完了させ、ワーディ・ファーティマ地域への再訪が実現された（写真2）。またワーディ・ファーティマ地域では、現所長他同センターの関係者がホスト役を担い、同センターの活動の紹介、情報交換のためのシンポジウムの開催、地域住民の紹介を行った（写真3）。

ワーディ・ファーティマ地域は1960年代から本格的に行政が整備され、1961年に労働省、社会問題省、農業水産省、教育省、そして保健省の共同事業で16の機関を設けることになり、地域における社会、文化、教育、農業、健康の水準を高めることを目的に、社会開発センター（以下、センター）が開設された。地域が抱える社会問題についても調査を行い、学校教育、食品衛生の見直し、病院での予防接種や治療を推奨した。

センターは住民から学校開設の申請を受けると、教育省を通じて教師を雇い、持ち運び可能な黒板とチョークを提供した。慣習的に子供たちは机や椅子を使わず、布やナツメヤシ製のマットを床に敷いて座り、膝の上で書いて学んできたが、ダフ・ザイニー村の小学校では、住民の協力で早くから高学年向けに机のある教室が設けられた。出生登録や学校登録が進むに連れ、民族集団同士の交流が進んだ他、若者は大工等の職業訓練を受けるようになった。センターは女子や母親に対して、効率的な家事や手仕事について訓練する機会や読み書きの授業を提供し、外国人女性を雇い診療所を設け、女性専用の医療体制を整えていった（藤本 2019a）。片倉もここは当時、子供たちにアラビア語を教える教師役を担ったこともあった（Katakura 1977; 藤本 2019b）。





写真2 ワーディ・ファーティマ社会開発センター関係者との記念写真  
撮影：縄田浩志，2015年3月25日，アル＝ジュムーム市



写真3 ワーディ・ファーティマ社会開発センター長から歓迎を受ける片倉邦雄  
撮影：縄田浩志，2015年3月25日，アル＝ジュムーム市

半世紀を経た今回の訪問で、中心都市のアル＝ジュームに大学が2校できる等地域は発展し、センターも講演用のホールやプールなど設備を設置、拡大していることを案内された。また職員は女性と男性が建物内で完全に仕切られたスペースで働き、女性部門では絵画等を飾る展示室をはじめ、パソコンルーム、美容室、スポーツジム等、すべて女性専用設置されていた。サッカー場、体育館、プール等は時間制で男性も女性も利用することができる。女性たちが手作りの品を売るコーナーも設け、アル＝ジュームで現在建設中の公園の一角でも販売予定であるということであった。地域に密着し女性の社会進出を支えるセンターの存在感は大きかった（藤本 2019a）。

学術的な観点から注目されたのは、センターに収集・保管されている数百点に及ぶ物質文化コレクションであった（写真4・5）。未来世代にとっての研究資料としての活用を地域住民との共同作業により行い、物質文化を中心とした民族的・文化人類学的学術資料の現代的活用の道を切り拓くことができるのでは、という展望を得ることができた（縄田 2017; 遠藤他 2021）。

同センターが企画したシンポジウムでは、片倉もとこフィールド調査資料の中から、景観写真を何枚か紹介したところ、同センター職員をはじめ、地元の郷土史家、新聞記者は強い興味を示し、発表に用いたデジタル写真のファイルを共有させてもらえないかという要望を受けた他、今後の継続調査を望む旨の提案をされた（写真6）。



写真4 ワーディ・ファーティマ社会開発センターに収集・保管されている物質文化コレクションを見学  
撮影：縄田浩志，2015年3月25日，アル＝ジューム市



写真5 ワーディ・ファーティマ社会開発センターに収集・保管されている  
物質文化コレクションについて職員から説明をうける  
撮影：縄田浩志，2015年3月25日，アル＝ジュムーム市



写真6 ワーディ・ファーティマ社会開発センターで開催されたシンポジウムで片倉もところフィールド調査資料のお披露目を行う  
撮影：縄田浩志，2015年3月25日，アル＝ジュムーム市

また、近年ワーディ・ファーティマ地域において実施された学術研究の資料を提供され、考古学分野の調査 (Norman et al. 1988) と土地利用と環境影響に関する調査 (Judas and Hoja 2007) が実施されていたことがわかった。ただし文化人類学的もしくは人文地理学的な社会調査は行われていないと判断された。

### 3.1.3 村人との再会によるフィールド調査写真の社会的価値の再発見と撮影場所の同定

ワーディ・ファーティマ社会開発センター職員により、片倉もとこが1980年代に滞在した際に居候していた教師一家のイード・アル＝ブシュリー氏宅に案内された (写真7)。イード氏と片倉邦雄は再会を喜びあい旧交を温めた。用意した数十枚の主に山並みや農地また村の様子の景観写真を、集まっていたいた古老3人に見ていただき、どの辺りで撮影されたと思うか聞いてみた (写真8)。何枚かの写真に対して、この写真はあそこだろうと示唆を受けた。その中でも、場所が明確ですぐ案内できると言われたのは、井戸で水くみをする人々が写り込んだ写真が撮影された場所であった。その井戸の名は、ビイル・シャーヒルという。翌日案内いただけることとなった。

そのあと女性メンバーは、片倉もとこをよく覚えている長寿女性の家を訪ねた。体調が良くないと聞いていたので心配していたのだが、顔を合わせると久しぶりに見る日本人に大喜びしてくださり、「Moko, Moko」と本当にうれしそうだった。女性メンバーはアラビア語を完全に操ることができなかつたのでコミュニケーションには苦勞したが、最初の話題は「誰が片倉もとこの娘なのか」という問いであった。太鼓を打ち鳴らし、歌を唄い、姉妹、娘、孫たちにダンスを踊らせて歓迎してくださった。楽しいひと時はあっという間に過ぎ、片倉もとこがワーディ・ファーティマの衣装姿で写っている写真を綴じこんだアルバムを土産とした。すると、彼女は急に懐かしいかつての暮らしを思い出したのか、思い立ったように古い飾面ブルグアを持ってこさせ、慣れた手つきでひもを結び、さっと着替えて見せてくださった。この方にとっては、その昔、東洋から突然現れた片倉もとこは今も心に深く残る懐かしい存在なのだろうと強く感じられた (縄田他 2015)。

この方こそ、人名の匿名表記について解説した際に例としてあげた (縄田・藤本他 2021)、片倉もとこと親交が深く著作に何度も登場していたAであることを、その後、知ることとなった。しかし無念なことに、翌年Aは他界し、再会はかなわなかつた。(本稿でAと匿名にしているのは、Aの遺族の要望に基づいており、A本人の希望があったわけではない。)

翌日、ビイル・シャーヒルに案内された。後ろに見えるシドゥル山の山並みはまさに写真のとおり、井戸はすでに使われなくなって久しいようだが、間違いなく、その写真が撮影された場所であることを確認した (写真9)。写真には、セメントで補強された井戸口に少年少女を含む複数の人々が集まり、手前には頭に一斗缶をのせて井戸に向かっ





写真7 片倉もところが調査当時居候していたイド・アル＝ブシュリー氏宅を再訪する片倉邦雄とアブドゥッ  
ラヒーム・アル＝アフマディ氏他片倉もところ記念沙漠文化財団メンバー  
撮影：縄田浩志，2015年3月25日，ブシュール村



写真8 片倉もところが調査当時居候していたイド・アル＝ブシュリー氏宅にて片倉もところフィールド写真を  
示し，撮影場所を聞き取る  
撮影：縄田浩志，2015年3月25日，ブシュール村



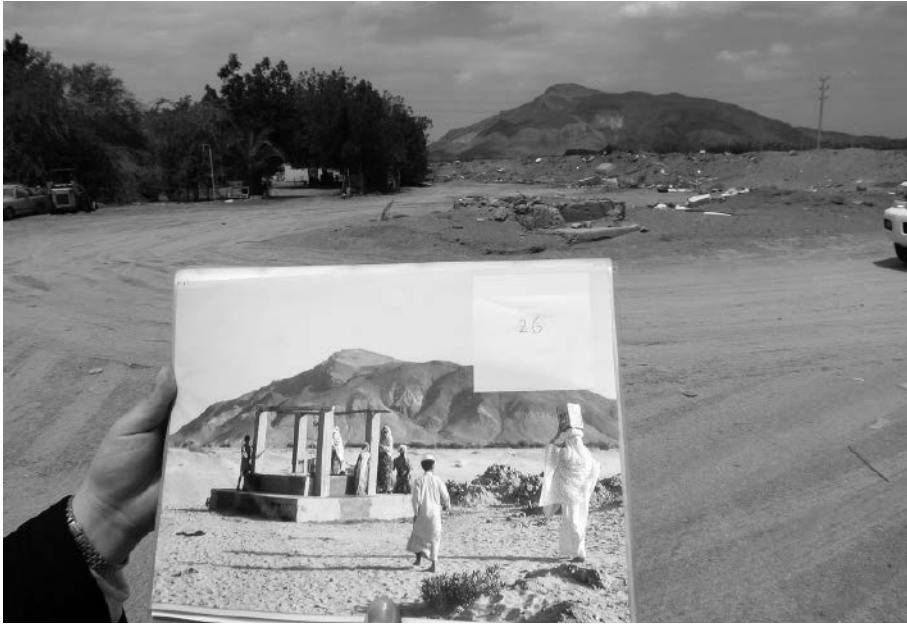


写真9 片倉もとこフィールド写真に撮影されていた井戸ビイル・シャーヒルを訪問して、新たな写真を撮影  
撮影：縄田浩志，2015年3月26日，ブシュール村

ている女性の姿が見える。この写真は後に「地域研究画像デジタルライブラリ」(略称 DiPLAS) に登録され、KM\_5579という番号が付与されることになった写真であり、頭に一斗缶をのせている女性は、片倉もとこであると村人が教えてくれた。当時撮影したのと同じフレームで、新たな写真を撮影してみた。そうすると気づいたことは、以前の写真には何も写り込んでいなかった所に、緑の樹木を確認できることであった。そこで撮影範囲を広げて、その辺りを認識し直すと、複数の樹木が覆う林のようにになっていることがわかった。その場所には、当時の写真には写り込んでいない樹木に囲まれた農地が、今は存在していたのである。

農地をイード氏に案内いただいた(写真10)。まず興味を持ったのは、電動ポンプにより水がくみあげられていることであった。写真に写し込まれた井戸は使われなくなってしまったが、そこから100mも離れていないワーディの一角で、新たな形での水利用は継続されていたのである。それも電動ポンプは複数台あり、水量も十分に見受けられた。その水を使って、オクラやモロヘイヤといった野菜が栽培されていた。農作業に従事するのは、パキスタンやインドから出稼ぎに来ている外国人労働者であった。

ワーディ・ファーティマ地域への再訪は、わずか数日でしかなかったが、得られたものは大きかった。現地の行政組織であるワーディ・ファーティマ社会開発センターの協力はもとより、何にもまして、片倉もとこ調査当時に交流があり当時の関係の延長とし



写真10 ビイル・シャーヒル近くの農地にあるポンプ設備を案内するイド・アル＝ブシュリー氏  
撮影：縄田浩志，2015年3月26日，ブシュール村

て新たなメンバーを迎え入れてくれる村人が多数存在しているということがわかったことがすばらしかった。

さらにメンバーが持ち込んだ過去のフィールド調査写真はほんの数十枚であったが、人々の興味を引きつけるには十分すぎるほどの効果があった。研究や報道の観点からの興味、自身や親族の姿が写し込まれているという点からの興味、そしてその写真を持って日本から再度訪問してきた私たちメンバーに対する興味、といったところを感じられた。フィールド調査写真はまぎれもなく、撮影された時の被写体であった地域の人々にとって、一定の社会的な価値を有していることを認識できた。

また具体的な活動として、過去のフィールド調査写真の撮影場所を同定すること、また被写体の人物を特定するということは、今後しっかりと時間をとって訪問し直せば、数十枚の写真に限らず十分な対応をしてもらえる、という確かな自信が得られた。

同時に強く感じられたのは、片倉もところによる最初の現地調査からちょうど50年、つまりおよそ半世紀が経過しているということは、当時交流していた人々、またそのことを記憶にとどめている人々は当然、わずかな数になっているということである。もしかしたら、あと10年いやあと数年もしたら、多くの関係者に会うことがかなわなくなってしまうことを強く危惧した。

以上のように、調査地ワーディ・ファーティマ地域を訪れ、生活や農地の現状を観察

すると共に現地関係者や研究者と議論を開始し、同地で継続調査が可能なことを確認できた。日本人がおよそ半世紀前に実施したフィールド調査を高く評価し、その発展的継承を強く願っていることも知った。同地において少しでも早く再調査を開始しない限り、現代につながる古老の知見や情報が記録されないまま永遠に失われかねないことを強く認識したため、本格的な学術調査計画を練ることとした。

## 3.2 新たな調査グループによるフィールド調査の計画と実施

### 3.2.1 調査テーマ策定

片倉もとは、1960年代末時点におけるワーディ・ファーティマ地域の父系、母系、婚姻関係という社会的紐帯について、また1950～1970年代の村への出入りを具体的に記載している。合わせて、用水量、家畜数、農地面積、農耕歴、食生活等を示しつつ、家計の支出入、市場の物価を一覧表にすると同時に、井戸の維持管理や農作業を担う農業労働者と土地所有者の関係についてもソシオグラムとして示している。くわえてワーディ沿いの耕作地と用水形態が詳細に記述され、住居域や家屋タイプについても地図に落とし込まれている。テントの構造、家屋のタイプ、室内の家具・台所用品等のスケッチといった物質文化の記録も豊富である (Katakura 1977)。

2015年3月にワーディ・ファーティマを訪れ、生活や農地の現状を観察し、当時のインフォーマントや関係者にコンタクトをとり、同地での再研究が可能なことが確認できた。現地の行政組織であるワーディ・ファーティマ社会開発センターに収集・保管されている数百点に及ぶ物質文化コレクションにアクセスできることも魅力的であった。また、現地の古老やリーダー達は日本人がおよそ半世紀前から継続して実施していた現地調査を高く評価し、その発展的継承を強く願っていることを知ることができた。

そこで、片倉もともフィールド調査資料を整理・再分析しつつ、衛星画像の解析や社会調査の手法を用いた新たな現地調査を実現すれば、当地域においてドラスティックな現象として観察される生活様式や資源利用形態の変化や世代間ギャップに具体的に迫ることができると考えた。そこで、現代の社会的紐帯を、土地利用、生業形態、資源管理、物質文化との関係から把握し、「社会共通資本としての水資源」に注目して、他のオアシス社会と比較しつつ、グローバル化後の変化を具体的に追うことを中心的テーマと定めた (図2)。

### 3.2.2 調査グループのメンバー編成

調査グループは、文化人類学・社会生態学の縄田浩志 (40歳代) を代表に、環境人類学・農村開発学の石山俊 (50歳代)、人文地理学の古澤文 (40歳代) と渡邊三津子 (40歳代)、また考古学の遠藤仁 (40歳代) をメンバーとして、日本学術振興会の科学研究費助成事業に申請した。幸い、「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的



図2 片倉もところフィールド調査資料を活用した研究テーマの策定 (出典：縄田 2020)

紐帯の変化に関する実証的研究」(基盤研究 (B), 課題番号 JP16H05658, 研究期間: 2016~2019年度)が採択された(縄田 2020)。また「アラムコ・片倉もところ沙漠文化協賛金」に基づく財団メンバーとして、郡司みさお、藤本悠子に加わり、ワーディ・ファーティマ地域再調査として、2018年4月~5月に第1回、2018年12月~2019年1月に第2回、2019年9月に第3回を実施した。特筆すべきは、第2回・第3回には、サウディ・アラビアからの第一期国費留学生として訪日して以来、10年以上の滞在をしつつ、日本の非鉄金属の会社に勤めながら、日本工業大学の大学院生として博士課程に在籍していたアナス・ムハンマド・メレー氏が、祖先がワーディ・ファーティマ地域出身であるという縁から、本調査グループに加わったことが挙げられる。アナス氏は現地におけるコーディネートから通訳までを一手に担い、的確なコミュニケーションでワーディ・ファーティマ地域の関係者との懸け橋となり、次第に私たち調査グループの共同研究者ともなっていた。

まず科学研究費助成事業に採択されたことにより、「地域研究画像デジタルライブラリ」へ申請する資格を得てデジタル画像登録につながったことこそが、片倉もところフィールド調査資料のなかでも特に写真資料の再分析が主要な研究活動となった理由である。ただあらためてここで確認しておきたいことは、DiPLASへの採択により写真のデジタル化を開始したわけではなく、遺された片倉もところフィールド調査資料の全体像を把握して、整理優先順位を定めて、写真のデジタル化を開始したのは、片倉もところ記念沙漠



文化財団の事業の一環として、それ以前に開始されていたことである（縄田・西尾他 2021）。

### 3.2.3 調査受け入れ機関の決定と調査への期待

調査グループは、2015年の現地調査から新たに繋がった人的ネットワークを手がかりに（片倉 2015）、サウディ・アラビア国家遺産観光庁の正式な受け入れによって、まずは2018年4月～5月の3週間、半世紀に及ぶ社会の変遷を本格的に追跡するフィールド調査にこぎつけることができた（縄田 2019b）。

在日サウディ・アラビア大使館を通じて、調査計画書を提出してから計画が許可された2017年10月までおよそ2年がかかったが、サウディ・アラビア国家遺産観光庁が受入機関と定められたことは、サウディ・アラビア関係者・関係機関による辛抱強い協力と適切な判断があった。本調査を管轄して共同研究を行うことになったサウディ・アラビアの首都アッリヤードにある国立博物館考古研究部長のアブドゥッラー・ビン・アリー・アッ＝ザフラーニー博士は、同国で日本人研究者を中心として実施される発掘調査隊を管轄する責任者でもあり、また、彼が大学院生時代には、JICA(当時の国際協力機構)事業「サウディ・アラビア考古学調査プロジェクト」にも携わった経験があった。同時に縄田浩志も1999～2000年にかけて同事業に短期派遣専門家として携わった経験があり、ザフラーニー博士とも面識があったことは、幸いであった。

またワーディ・ファティマ地域での調査研究活動は、中央政府の正式な受入機関のみならず、片倉もとこ調査時から関係が深かった地元の社会開発センターに加えて、マッカ州知事やアル＝ジュムーム市長からも全面的なサポートを得た。あわせてサウジ国営情報局をはじめとした複数のウェブ新聞が取り上げるなど、大きな関心が寄せられた（サウジ国営情報局電子版 2018）。その背景の一つとして、2016年4月にサウディ・アラビア政府が発表した「ビジョン2030」において示された文化、歴史、観光関連産業への期待が大きな後押しになっているように感じられた。

2018年12月、人間文化研究機構「現代中東地域研究」秋田大学拠点・国立民族学博物館拠点と片倉もとこ記念沙漠文化財団が協力して、首都にあるキング・ファイサル・センターならびにダハラーンにあるサウジアラムコ附属のキング・アブドゥルアジーズ世界文化センター、通称ithraから学芸員を招いて「アラビア半島の文化遺産保護の現状と展開—サウディ・アラビアを中心として」と題した国際シンポジウムを横浜で開催した。あわせて、国立民族学博物館の収蔵庫、収蔵品の保管方法などを視察いただいた。

そのような交流のいかにもあり、片倉もとこ記念沙漠文化財団は2018年5月にキング・ファイサル・センターと覚書を締結して、今後、学術コレクション・展示・研究等において連携し、日本とサウディ・アラビアの文化の相互理解を深め協働していくことで合意した。キング・ファイサル・センターは1983年に設立され、16,000点を超える古書・



古文書を保管し、サウディ・アラビアの各地域における歴史・文化のデジタルアーカイブ化を推進してきたサウジ有数の研究組織である。

もうひとつの大きな収穫は、ithraの訪問にあった。片倉もところ記念沙漠文化財団がアラムコ・アジア・ジャパン株式会社との間で、「アラムコ・片倉もところ沙漠文化協賛金」に関する協定を結んでいる縁から、一般公開直前、特別に中を案内していただいた。総敷地面積100,000㎡に及ぶサウディ・アラビア初の総合文化施設と呼べるもので、博物館、図書館、講堂、劇場、映画館などを備えている。20万冊収蔵の図書館はアラビア半島一の蔵書を数え、映画館は首都に次いで同国2番目の施設になると言う。地域性豊かなイスラーム文明史、またアラビア半島における自然科学から現代アートまで幅広い展示を行う博物館は、今後世界から高い評価を得るであろう。そして最新の技術を用いた体験型・インラークション型の子供用レクリエーションまた教育フロアでは、楽しみ学べる多くの工夫を体感することができた。この充実した完成度の高い文化施設、特にその洗練された展示内容に、多くを触発された。

同時に私たちはまた、ithraの展示責任者らを前にして、片倉もところによるフィールド調査資料の価値、またそれを軸に準備中の日本開催の展示案などを説明するプレゼンの機会をいただいた。ある学芸員は「あなたたちは、私たちが手にすることができない貴重なコンテンツを持っている」と褒めていただいた。将来的にithraを会場として、共同で展示を企画できないか、という話にまでこぎつけることができたのである。

ワーディ・ファーティマ地域において被写体の人々に写真を確認してもらう過程で、調査研究を飛躍的に前進させる印象的な出来事があった。その写真は建物を中心として村の様子を撮影した写真であったが、その手前に少年の姿が認められた(写真11)。少年が自分であることに気づいた村人アリー・ザイニー氏は大いに喜び、写真を感じ深げに眺めて「この撮影場所を案内してあげよう」と積極的に提案された。当時の家屋は取り壊されたり大幅な増改築がほどこされ、面影をほとんど残していなかったが、この写真が撮影された場所を同定した(写真12, 渡邊他 2021: 写真31)。これをきっかけとして、その前後に撮影されたと考えられる村の景観の一連の写真の撮影場所を次々と同定できた。「50年後のアリーさんも一緒に写真を撮ってもよいか」とお願いすると快諾いただいた(縄田 2019a; 2019c)。アリー氏と出会い、新たな関係を構築することができたのは、半世紀前の一枚の写真が取り持った縁であり、日本人研究者とサウディ・アラビアの村人を繋ぐたった一本の新たな関係ではあるが、多方面に波及する社会連携の大きな扉を開けることができたことを実感した。

アリー・ザイニー氏との交流はその後の調査でも続き、私たちが撮影した写真の出版物への掲載、展示会場での利用について快諾いただいた。また新聞連載の際にも、このエピソードを紹介したが(縄田 2019d)、その新聞記事を早く見せてほしいと懇願されている。



写真11 子供の頃の自分が写りこんでいた写真を感慨深げに眺めるアリー・ザイニー氏  
撮影：縄田浩志，2018年5月2日，ダフ・ザイニー村



写真12 1960年代に撮影された写真の撮影場所で当時の様子を再現する撮影を快諾したアリー・ザイニー氏  
撮影：縄田浩志，2018年5月2日，ダフ・ザイニー村

## 4 片倉もところフィールド調査資料、特に写真資料の社会的特徴

### 4.1 再調査・再研究を可能にした資金調達、人間関係、受入機関

片倉もところの遺志による片倉もところ沙漠文化財団の設立によって、片倉もところフィールド調査資料に基づくサウディ・アラビア、ワーディ・ファーティマ地域再調査への道が拓かれた。具体的には、資金調達、人間関係、受入機関に恵まれたことにある。

資金調達においては、片倉もところ沙漠文化財団とアラムコ・アジア・ジャパン株式会社との間で締結された「アラムコ・片倉もところ沙漠文化協賛金」の貢献度が高い。本基金により、潤沢な資金的裏付けをもって、ワーディ・ファーティマ地域における再調査の準備が加速していった。片倉もところの夫、片倉邦雄を中心とする財団メンバーによって2015年にワーディ・ファーティマ地域への再訪がかなったことによって、実際に実現可能性が高い具体的な調査計画の立案、すなわち片倉もところフィールド調査資料のなかでも写真資料を用いた研究へとつながっていった。

そして何といたってもワーディ・ファーティマ地域への再訪や再調査が実現した最も大きな理由は、ワーディ・ファーティマ地域における調査の苦楽を共にした片倉もところ・片倉邦雄夫妻と、ワーディ・ファーティマ社会開発センター元所長アブドゥッラヒーム・アル＝アフマディ氏との長年にわたる交流が続いていたことであった。半世紀以上に及んで継続し醸成されてきた日本とサウディ・アラビア両国をまたぐ人間関係を基盤として、自然な形で新たな世代を中心とした人間関係へとつながり、調査対象国であるサウディ・アラビアの人々と関係機関による理解、受入、協力、共創へと発展する本格的な調査研究プロジェクトが形成された。

新たな調査研究活動は、サウディ・アラビア国家遺産観光庁が受け入れ機関となることにより、2018年に正式に開始された。国立博物館考古研究部長アブドゥッラー・ビン・アリー・アッ＝ザフラーニー博士は、考古学を専門とする研究者であるが同時に、いやだからこそ、およそ半世紀前サウディ・アラビアの地域コミュニティーに入り込んで収集された片倉もところフィールド調査資料の学術的特質を的確に理解し、1960年代後半から1970年代前半という時期に撮影、記録されたフィールド調査写真を中心として、サウディ・アラビアの歴史史料また生活記録の観点からほとんど同類の資料は存在しないという点について、高く評価した。したがって、同地で再調査を試みようとする私たち調査グループの計画への最大限の協力と協働を約束してくれたのであった。

くわえて、結果論ではあるが、本調査計画が立案された時期がまさに時を得ていたと言える。サウディ・アラビア政府が「ビジョン2030」を示したのは2016年4月のことであったが、そこでは文化、歴史、観光関連産業の発展が明記されていた。ワーディ・ファーティマ地域を対象として50年の変化をすくいあげる私たちの学術的調査は、これまでも増して文化遺産に光をあて観光に力を注いでいこうとするサウディ・アラビア政

府や民間組織による直近の方向性といみじくも道を交えることになったといえよう（縄田 2019b）。私たち調査グループによる再調査の開始について、サウジ国営情報局をはじめとした複数のウェブ新聞が取り上げるなど、大きな関心が寄せられたことから理解されるように、現代のサウディ・アラビア社会にとって、サウディ・アラビアを調査対象国として収集された片倉もとこフィールド調査資料は、高い歴史的、社会的価値を有する学術資料と認識されはじめたと考えられる。

## 4.2 調査対象であった地域コミュニティが期待すること

ワーディ・ファーティマ地域への訪問は、最初のワーディ・ファーティマ地域調査当時に妻・片倉もとこに同行することもあった夫・片倉邦雄が調査メンバーとして参加したため、再訪ということになり、片倉もとこ交流のあった村人との再会をすることができた。片倉もとこの重要なインフォーマントであった女性、片倉もとこ調査時の居候先の家族、そして片倉もとこが撮影した写真に写り込んでいた子供との出会い、といったように、片倉もとこ調査当時に交流があり当時の関係の延長として、新たなメンバーを迎え入れてくれる村人との新たな関係の構築につながっていることの実感を得た。

同時に強く意識したのは、片倉もとこによる最初のフィールド調査からおよそ半世紀が経過しているため、当時交流していた人々、またそのことを記憶にとどめている人々は、わずかな数になっていることであった。この数年を逃してしまったり、最初の研究者と村人の中で構築された人間関係、信頼関係を継続する機会を永遠に失うことになってしまうという現実に向きあうことになったといえる。

その後の本格的な調査活動として、過去のフィールド調査写真の撮影場所を同定すること、また被写体の人物を特定するということができる、という確かな自信が得られた。なぜならば、具体的には、片倉もとこが撮影した、あるフィールド写真の場所をビル・シャーヒルと同定して現在の様子を比較して記録することができたからであり、片倉もとこの居候先であったイード・アル＝ブシュリー氏が声をかけてくださった古老たちへ実際にインタビューすることができたからであり、また、片倉もとこの深い親交があった長寿女性に再会することができ、片倉もとこ縁のある新たな世代の私たちへの温かい気持ちを強く感じることもできたからであった。

アブドゥッラヒーム・アル＝アフマディ氏の努力により、現地の行政組織であるワーディ・ファーティマ社会開発センターが現地での受入機関として協力してもらえることとなった。またワーディ・ファーティマ社会開発センターに収集・保管されている数百点に及ぶ物質文化コレクションを利用できる許可を得ることができたため、フィールド調査写真の再分析と物質文化コレクションの研究を調査活動の柱とする目途をつけることができた。さらには、ワーディ・ファーティマ社会開発センターが主催で、情報交換のためのシンポジウムを同地で開催したことによって、地元の郷土史家らがフィールド



調査写真を中心とした調査資料に興味を示すと同時に今後の継続調査を望む旨の提案を受けたため、現地における再調査に対する協力、また将来的な共同調査へとつなげることができる感触を得た。

以上のように、調査地ワーディ・ファーティマ地域を実際に訪れて、実現性を伴った本格的な学術調査計画を練りあげることができた。そして、片倉もところフィールド調査写真の社会的価値を、調査地ワーディ・ファーティマ地域において確認できたことが、科学研究費助成事業による学術調査へと発展させる原動力となったのである。

### 4.3 フィールド調査写真の整理・公開・利用に向けた社会的課題

集約的なフィールド調査を行い、また継続的に調査研究を実施していくなかで、調査対象であるコミュニティとの関係が深まっていく。その過程において、調査者が撮影した写真をコミュニティのメンバーにプレゼントすることは、頻繁にあるというより、人類学的なフィールド調査を目指すほとんど全員が実践していることだろう。場合によっては、調査コミュニティにおいてフィールド調査写真を用いた写真展を開催したり (Kemper and Royce 2002)、最初の調査研究者が撮影したアーカイブ写真の再利用による展示会を実施したり (Sbriccoli 2016)、フィールド調査写真という学術資料を使って、時にはある種の商業性を伴って、社会に向けた公開活動をしていくことがある。その際、フィールド調査写真を公開して利用することに対して、ほとんど社会的な支障が存在しないことも多いかと思われる。

しかしながらその一方、最大限の注意を払い、解決方法への道筋をつけない限り、利用がままならないケースもある。ワーディ・ファーティマ地域を対象とする片倉もところフィールド調査写真を扱う際に、まず強く意識しなければいけないことは、いつ、どこで、何を、誰を対象として撮影したのか、という基礎情報の重要度であった。再分析による二次的利用を計画することになった私たち調査グループが、その点について明確に認識することができたのは、本格的な再調査を開始する前、片倉もところ記念沙漠文化財団の設立披露パーティー終了後に、サウディ・アラビアの複数の関係者から指摘された写真の取り扱いに関する注意事項にあった。

イスラーム社会では一般的に成人女性の写真を家族以外に公開することは認められない、といった考え方だけでは、まったく十分ではないことを意識できた。被写体の性別にかかわらず、被写体の人物とその写真を見ることになる人物との社会的関係性を強く意識して、公表の範囲と媒体手段を限定しなければならないということ、女性を被写体とする写真群の公表の可否は、時代や地域、また社会や個人によっても異なる可能性を想定しなければならない、という点にはじめて思いが至るようになったのである。

後になって、中東社会を対象とする写真撮影の歴史を紐解いていくにつれて認識するようになったことは、私たちの心の奥底に潜んでいるオリエンタリズムとも呼べる潜在



意識であった。公開について最大限の注意を払わなければならないと指摘された、伝統的な衣装をまとった女性、また女性の喫煙シーン、といった写真こそ、実は観光客やオリエンタリストたちが好んだ主題と構図でもあったのである (Alloula 1986; Grotenhuis 2017)。もちろん私たちの意図は、そのようなものとは一切関係なかったと思いたいが、少なくともその写真を見た受け手に違和感や不快な気持ちを抱かせることがあったのなら、そこに大きな問題点が横たわっていたことを認めざるをえない。

したがって、ワーディ・ファーティマ地域を対象とする片倉もとこフィールド調査写真の学術的価値がいかに高くあろうとも、また再調査への社会的期待がどれほど高まってこようとも、調査対象国の人々、現地社会、特に調査コミュニティとの信頼関係なしには、写真の整理と公表は続けていけないと判断された。このような認識を大前提としつつ、調査コミュニティと新たな関係を構築することにより、フィールド調査資料の持つ社会的側面を認識したことが、写真資料整理そしてデジタルファイルのアーカイブ登録、すなわち「地域研究画像デジタルライブラリ」(略称DiPLAS)への登録へとつながっていった。ワーディ・ファーティマ地域を対象とする片倉もとこフィールド調査写真を登録する際に、学術的価値と社会的価値の両方との折り合いをつけられるかという課題が、第一の障壁として立ちはだかったが、その点についての技術的また理論的な諸課題については、次稿で議論していきたい(縄田・西尾他 2021)。

## 参考文献

〈日本語〉

アル・アフマディ、アブドゥッラヒーム

2014 「片倉もとこ沙漠文化」片倉邦雄訳『片倉もとこ記念沙漠文化財団ニューズレター』1: 7 (アル・リヤド新聞 2014年2月27日 (<http://www.alriyadh.com/91357>) にも寄稿)。

遠藤仁・渡邊三津子・藤本悠子・古澤文・郡司みさお／アナス・ムハンマド・メレー／黒田賢治・西尾哲夫・縄田浩志

2021 「国立民族学博物館収蔵片倉もとこ収集資料とサウディ・アラビア、ワーディ・ファーティマ社会開発センター所蔵生活用具との比較研究」『片倉もとこフィールド調査資料の研究』西尾哲夫・縄田浩志編(国立民族学博物館調査報告153) pp. 87-138, 大阪: 国立民族学博物館。

片倉邦雄

2015 「半世紀後のワーディ・ファーティマ」『季刊アラブ』153: 20-21。

2019 「片倉もとこの人間像——ひとり三役をふり返る」縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』pp. 26-27, 東京: 河出書房新社。

片倉もとこ

1979 『アラビア・ノート——アラブの原像を求めて』東京: NHK 出版。

- 1984 「荒野に生きる女性たち」『季刊民族学』28: 6-23。  
 片倉もところ・後藤明・中村光男・加賀屋寛・内藤正典編  
 2002 『イスラーム世界事典』東京：明石書店。
- 河田尚子  
 2014 「公開シンポジウム『片倉もところ先生をフィールドワークする』開催報告」『片倉もところ記念沙漠文化財団ニュースレター』1: 8。
- 郡司みさお  
 2014 「片倉もところ記念沙漠文化財団設立披露パーティー開催報告」『片倉もところ記念沙漠文化財団ニュースレター』1: 4-5。
- サイード, E. W.  
 1986 『オリエンタリズム』今沢紀子訳, 東京：平凡社。
- サウジ国営情報局電子版  
 2018 「日本人研究者によるワーディ・ファーティマ調査について 2018年5月4日」<http://www.spa.gov.sa/1759614> (2020年7月1日閲覧)
- 縄田浩志  
 2017 「移動戦略を沙漠の物質文化から探る」『民博通信』157: 18-19。  
 2019a 「ワーディ・ファーティマの人びと——半世紀の変化をおって」『月刊みんぱく』43(6): 2-3。  
 2019b 「ワーディ・ファーティマで本格的に再調査——国を豊かにする“文化”資源の可能性」『季刊アラブ』166: 23-24。  
 2019c 「一枚の写真が取りもつ縁」縄田浩志編『サウジアラビア, オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』pp.40-41, 東京：河出書房新社。  
 2019d 「サウジアラビア, オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』⑤写真 村も少年も様変わり」『毎日新聞』12月14日朝刊(神奈川版)。  
 2020 『科学研究費助成事業研究成果報告書「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」(基盤研究(B), 課題番号JP16H05658, 研究期間: 2016~2019年度)』URL: <https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-16H05658/16H05658seika.pdf> (2020年8月7日閲覧)
- 縄田浩志・片倉邦雄・吹田靖子・郡司みさお・河田尚子・藤本悠子  
 2015 「2015年アラムコ・片倉沙漠文化協賛金 サウジアラビア事前現地調査報告」『片倉もところ記念沙漠文化財団ニュースレター』2: 3-18。
- 縄田浩志・西尾哲夫・片倉邦雄・藤本悠子・河田尚子・古澤文・渡邊三津子・遠藤仁・石山俊  
 2021 「片倉もところによるサウディ・アラビア, ワーディ・ファーティマ地域を対象とするフィールド調査写真のアーカイブ登録について」『片倉もところフィールド調査資料の研究』西尾哲夫・縄田浩志編(国立民族学博物館調査報告153) pp.63-86, 大阪：国立民族学博物館。
- 縄田浩志・藤本悠子・河田尚子・片倉邦雄・郡司みさお・古澤文・渡邊三津子・遠藤仁・石山俊  
 2021 「片倉もところによるサウディ・アラビア, ワーディ・ファーティマ地域を対象とするフィールド調査資料の学術的特徴について」『片倉もところフィールド調査資料の研究』西尾哲夫・縄田浩志編(国立民族学博物館調査報告153) pp.1-30, 大阪：国立民族学博物館。

藤本悠子

- 2019a 「ワーディ・ファーティマ社会開発センターの影響と役割」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.148-149, 東京：河出書房新社。
- 2019b 「外国人労働者との関係」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.150-151, 東京：河出書房新社。

〈外国語〉

Alloula, M.

1986 *The Colonial Harem*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

‘Ārif al-‘Ārif

1974 *Bedouin Love, Law and Legend*. Jerusalem: Cosmos Publishign.

Bell, G.

2000 *Gertrude Bell : The Arabian diaries, 1913-1914*. Edited by Rosemary O’Brien, with photographs by Gertrude Bell, Syracuse, NY: Syracuse University Press.

Gertrude Bell Archive

2020 Gertrude Bell Archive, University Library, Newcastle University. <http://gertrudebell.ncl.ac.uk/> (accessed August 7, 2020)

Grotenhuis, L.

2017 Smoking Hot: The Odelisque’s eroticizing Cigarette. <https://doi.org/10.4000/viatourism.1842> (accessed August 7, 2020)

Howe, K. S.

2008 Africa North. In J. Hannwavy (ed.) *Encyclopedia of Nineteenth-Century Photography*, Vol. 1, pp. 18-20. New York: Routledge.

Judas, J. and A. Khoja

2007 *Land Management in Ayn Shams (Meccah Emirate)*, Riyadh: National Commission for Wildlife Conservation & Development (NCWCD).

Katakura, M.

1977 *Bedouin Village, A Study of a Saudi Arabian People in Transition*. Tokyo: University of Tokyo Press.

Kemper, R. V. and A. P. Royce

2002 Restudies and Revisits: Styles of Collaborative Research. In R. V. Kemper and A. P. Royce (eds.) *Chronicling Cultures: Long-Term Field Research in Anthropology*, pp.1-7. Walnut Creek, CA: A Division of Rowman & Littlefield Publishers.

Luminous-Lit

2020 Photography: History, Evolution and Analysis. <http://www.luminous-lint.com/app/home/H1/> (accessed August 7, 2020)

Nassar, I.

2019 Karimeh Abbud: First Female Photographer of Palestine. In T. Verde (ed.) *Women behind the Lens: The Middle East’s First Female Photographers*. *AramcoWorld* 70(2): 28-31.

Norman, M. W., J. Siraj-Ali, O. S. Hassan, W. P. David, and A. B. Muhammad

1988 A Complex of Sites in the Jeddah: Wadi Fatimah Area. *ATLAL: The Journal of Saudi*

- Arabian Archaeology* 11 (2): 77-85.
- Özandes, E.  
2008 Ottoman Empire: Asia and Persia (Turkey, the Levant, Arabia, Iraq, Iran). In J. Hannwavy (ed.) *Encyclopedia of Nineteenth-Century Photography*, Vol. 2, pp. 1034-1037. New York: Routledge.
- Perez, N.  
1998 *Focus East: Early Photography in the Near East (1839-1885)*. New York: Abrams.
- Sbriccoli, T.  
2016 Between the Archive and the Village: The Lives of Photographs in Time and Space. *Visual Studies* 31 (4): 295-309.
- Schmidt, H. and G. La Rock  
2019 Boudoir Card: Vintage Postcards of the Belle Epoque. <http://www.helmut-schmidt-online.de/Boudoir-Cards/bc-introduction.html> (accessed August 7, 2020)
- Sheehi, S.  
2019 Behind Every Male Photographer: The Invisible History of Local Women Photographers in the Middle East. In T. Verde (ed.) *Women behind the Lens: The Middle East's First Female Photographers*. *AramcoWorld* 70 (2): 28-31.
- Stapp, W.  
2008 Egypt and Palestine. In J. Hannwavy (ed.) *Encyclopedia of Nineteenth-Century Photography*, Vol. 1, pp. 475-478. New York: Routledge.
- Verde, T.  
2019 Women behind the Lens: The Middle East's First Female Photographers. *AramcoWorld* 70 (2): 28-31.